

はじめに

藤原良章

本書は、中世に生きた人々の諸側面を、歴史学・考古学、あるいは文学の立場などから考察してみたものである。私が、中世考古学の専門家などとあちこちに足を運ぶようになったのは、一九九五年あたりからである。当時、網野善彦・石井進氏等によって歴史学と考古学をはじめとした隣接諸科学の協業の必要性が強く提唱されており、その実現に向けたささやかな試みの一つであった。当時は、正式な名称は決められず、「中世かわらけ研」とか称して、徒党を組んでは発掘現場などを訪れていた。その成果は、『月刊歴史手帳』誌上の小特集、「伊豆韮山の中世を読む」(二三一九)・「出羽国遊佐荘から中世を読む」(二四一〇)・「瑞巖寺境内遺跡と中世の松島」(二五一二)として報告されることになった。

と同時に、私は次第に中世芸能にも大いなる関心を寄せるようになっていた。直接の原因は、網野氏を研究代表者とする「職人歌合研究会」であった。会では、「職人歌合」に登場する〈職人〉についての研究発表などが行われていたが、やがて、岩波書店の「新日本古典文学大系」に、『七十一番職人歌合』が収められることになり、私たちがその職種解説にあたることになっていた。執筆メンバーは五人であり、左右合わせて百四十二職種の解説をするために、ジャンルごとに分担することになった。私は、主に武具・馬具、そして、いわゆる芸能関係を担当することになり、芸能関係としては、田楽・猿楽・楽人・舞人を担当した。これがきっかけとなり、中世芸能にはまり込んだ私は、土

谷恵氏などと共に、「CG研」なるものを立ち上げることになった。個人の研究発表や、一度ではあるが、静岡県の森町を訪ね、小國神社十二段舞楽を見学したこともあった。誤解されやすい名前ではあるが、「CG」は当時はやりの「コンピュータグラフィックス」ではなく、「中世芸能」の頭文字そのものであった。最近、かつて、井上光貞氏を中心として、「K・B研」なるものがあつたことを知ることになった(石井進「下総国千田荘(上)」、『石井進著作集第八巻 莊園を旅する』所収)。そして、それが「鎌倉仏教研究会」の略称だつたことを知ったとき、ありがたい先達に恵まれたものだ、と一時感動したものである。

ところで、中世芸能関係の勉強をはじめてみると、「水辺の都市的空間」というべきところが、中世芸能の一大拠点である、ということが見えてきた。つまり、芸能は交通と密接に関わって伝播していったと言ふことである。芸能の問題は、交通の問題を見ていかなければよく分からない、という認識が、漠然とではあるが頭の片隅にあつたことは事実である。

そんなおり、たまたま先の「中世かわらけ研」のメンバーで見学させていただいた福島県郡山市の荒井猫田遺跡は、極めて印象的なものであつた。当時発掘を担当されていた高橋博志氏をして「わけがわからない」と言わしめたその遺跡の中心を、「道だー」と断定したのは、「かわらけ研」の飯村均氏であつた。二条の溝が長らく続いたその空間こそが、道であり、その両側にはおびただしいまでのピット跡が、そして、堀に囲まれた得体の知れない空間までが連続していた。これは、交通に関わつた中世の都市的空間に他ならない、という認識で一致したメンバーは、連想を広げていった。翌日の地元紙には、この遺跡の紹介記事が掲載され、それには「頼朝も通つたか」といつたような、私たちの妄想にもとづくキャプションがつけられていた。

それはともかくとして、もう一つの要素がある。私のその当時の自宅近くに、小さな橋があり、その傍らに看板が立てられていた。

二枚橋の由来

治承四(一一八〇)年の秋、源頼朝が平家を滅ぼそうと旗揚げをした折りに、弟の義経が奥州の平泉から弁慶や伊勢の三郎・駿河の二郎たちを従えてかけつける途中ここを通りかかり当時の橋が粗末なものであったので、弁慶たちが馬も通れる橋に作りなおした。その橋は丸太を並べた上に土を盛ってあり、横から見るとのし餅を二枚重ねたように見えるので二枚橋と名付けた、という言い伝えが残っている。

当然のことながら、そんなわけではないだろう、と一笑に付していたものであった。その橋から鎌倉方面に向かうには、すぐ南を小田急線が東西に走り、道を分断していたからである。だが、その南北道は、歩道橋で小田急線を渡り、そのまま南下していたのである。こうして、関心は否応なく交通・道へと向かっていった。荒井猫田遺跡で感激していた「かわらけ研」の皆さんと共に「中世みちの研究会」を立ち上げるまで、それほど時間は要しなかった。こんな感じで、様々なことに首を突っ込んできたし、志を共にする仲間たちにも大変恵まれてきたことを実感している。ただ残念なことは、私の性格からであろう、そうした仲間たちとの研究成果をまとめ上げてこなかったことである。それがこのたび、黒嶋敏・中澤克昭氏のご厚意によって論集を出そうということになった。それならば、これまで志を共にしてきた仲間たちと、成果をまとめ上げてみたい、ということになった。以上が、本書刊行の経緯である。

*

こうした性格の本であるため、関心は様々なところに及び、きちんとしたまとまりに欠けるきらいがあることは、ままあるところである。だが、一応本書は三部構成を取ることができた。以下、本書の主な内容について概観しておきたい。

第一部は、「武士の世界」である。

藤原『後三年合戦絵詞』の世界」文字通り、『後三年合戦絵詞』を扱ってみたものである。基本的には、二〇一年十二月に、秋田県横手市で開催されたシンポジウム「日本史における後三年合戦の意義」での口頭報告をもとにしている。本書の執筆者でもある八重樫忠郎氏からの電話で依頼を受け、報告することとなり、慌てて絵巻をひっくり返してみた結末である。

八重樫忠郎「平泉と鎌倉の手づくねかわらけ」主に、平泉と鎌倉出土のかわらけに注目する。この両者では手づくねかわらけが導入される時期は三〇年ほどの開きがあり、形状にも相違があるにしても、京都のものより大きく、同じく灰白色をしていた、という共通性があることに注目して、両者の導入期の特徴を追求する。さらに、「京都の保守という呪縛」なる概念が提起される。

落合義明「中世武蔵武士の成立―高麗郡の高麗氏の場合―」古代郡司と中世武士の関係について論じている。具体的には、高麗郡の二つの高麗氏を取り上げ、平姓高麗氏が自身の根拠地ではない渡来系高麗氏の寺に鐘を寄進したことに注目する。さらに、平姓高麗氏の所領の分析から、交通との関連に言及し、南北朝期以降における両高麗氏の盛衰について論ずる。

真鍋淳哉「三浦氏と京都政局」標題のごとく、鎌倉御家人三浦氏と京都政界とのつながりを解明する。三浦氏の官歴、承久の乱と三浦氏の動向、特に戦後処置における三浦氏の役割、芸能、西園寺家や九条家との関係などを検討し、三浦氏が京都でどのような存在として考えられていたかについて論及する。

岡陽一郎「境界と貴人―武士論あるいは都市論―」中世都市平泉・鎌倉、そして一乗谷、そこを訪問した貴人である、義経や足利義尹・足利義昭。平泉を訪れた義経の宿所衣川、囚人平宗盛を伴って鎌倉に下向した義経がとどめられた腰越、一乗谷にやってきた「將軍家」を迎えた城戸の外の寺院。都市の中心部と境界部がどのような意味を持つていたものかを追求する。

黒嶋敏「鎌倉幕府と南の境界」 嘉元四年四月付の千竈時家処分状を出発点とし、北の安藤氏とならんで、北条氏の海上支配を代官として支えたこととされる千竈氏の再検討を行う。ついで、金澤文庫本「日本図」に「雨見嶋、私領郡」とあることから、千竈氏などが奄美大島などを私的に支配していた、とする説にも強い疑問を投げかける。さらに、鎌倉幕府にとつての西南諸島の意義が問われる。

第2部は、「みちと交流」とした。

飯村均「中世のムラ―北から―」 中世のムラ研究が停滞していることに危機意識を持ち、その方法などを具体的に提示したものの。主に、北日本の事例を取り上げる中で、交易の中心を成したような集落で、実は考古学的手法では見えてこないような、いわゆる「板壁掘立柱建物」や「壁支建物・土台建物」のようなものも重要な役割を果たしていたことに注目すべきことを提言する。

藤本頼人「別所」地名と水陸のみち」 これまでも様々に言及されてきた別所地名に注目する。まずは、地図上に別所地名を落とし、それが交通路とかなり密接に関わっていることを確認した上で、別所地名と交通路との関係はいかなる事情によるのか、というテーマに力強く迫る。

鈴木沙織「下総東部における水上交通―香取内海地域と房総太平洋を結ぶ水上の東西ライン―」 下総国太平洋側の交通の問題に注目したもの。千田荘は、従来からも粟山川水運と下総を東西に横断する「下総道」の交わる交通の要地であることが指摘されてきたが、さらに精緻に現地調査を加え、新たなルート、城郭の配列などを解き明かし、千田荘内にある東禅寺に残る大型の五輪塔などが語る意義を説明する。

田中信司「武蔵国北辺の戦国期交通網について」 間口(埼玉県大利根町)の船の往来を一時禁制し船橋の設置を命じた北条氏朱印状を起点に、栗橋をはじめとした武蔵北辺の水陸の交通を検討したもの。特徴的なのは、利根川の流路、あるいはその利用、そして陸上のいわゆる鎌倉街道中道の経路について、古文書を徹底的に読み込んで追ったところ

であろう。

鈴木弘太「骨寺村と中尊寺を繋ぐ道」中尊寺に遺された二枚の絵図がある。骨寺村の絵図である。後筆部分を取り除いた上でその絵図の復元を行い、絵図に描かれた「茲恵塚」について考古学的な検討を行う。さらに、不動窟の考古学的検討、そしてその裏を走る馬坂新道の関係を論じた上で、中世における骨寺村と中尊寺を結んだであろう道を明らかにする。

福原圭一「直江状」と上杉景勝政権のインフラ整備 越後から会津に移封された上杉景勝は、徳川家康より謀反の疑いをかけられる、という著明な事実から、その疑いの原因でもある、景勝による道などのインフラ整備の検討、かつての領国の郡絵図の分析などをつうじて具体的な整備のあり方をふまえ、景勝のインフラ整備における幹線道路網の位置づけを検討する。

第3部は、「芸道と信仰」としてまとめた。

植木朝子「『梁塵秘抄』の職人たち―博打・土器造をめぐる―」『梁塵秘抄』に登場する博打・土器造に注目したものの、『梁塵秘抄』におさめられた今様には「国々のはくとうに」なるフレーズがあり、これまで文学・歴史を問わず、「博党」の漢字が当てられ、国々に党をなす博打集団の存在が示されるとされてきたが、史料に現れるのは「博堂」であるとした上で、巫女との関わりを論ずる。また土器造についても、『梁塵秘抄』に歌われた楠葉御牧の土器造についてのこれまでの評価を、あつさりといつくり返してみよう。

柴佳世乃「読経道の成尋阿闍梨説話―読誦と奇瑞―」入宋し、祈雨に成功したことなどで著名な成尋阿闍梨についてまとめられた『読経道口伝明鏡集』について検討する。まずは他の成尋伝との比較対象から、この『口伝』が独自の伝承に取材して成立したものであることを指摘し、未だ読経道が成立する前の人物である成尋が、読経道で、どのような視点で伝承されたのか、また、読経道が伝承されたのはいかなる場であったのかを追求する。

山口博之「板碑と木製塔婆―山形県と大分県の板碑の類似から―」山形県域、特に米沢を中心とする置賜地域に分布する板碑と、大分県の国東半島を中心とする地域の板碑の形態が極めて類似していることは、すでに指摘されてきたという。そこでなぜこのような現象が起きるかについて、全国各地の、しかも、石製・土製・木製・鉄製、といったありとあらゆる板碑、さらに絵画資料まで含めて総合的に検討し、その謎に迫る。

豎月基「中世前期貴族層における父子関係覚書―『明月記』に見える定家と為家―」中世前期貴族層での父子関係を『明月記』に探ったもの。元服以前、元服後(正確には政治的行動開始後)では定家と息子が為家の関係が大きく変化すること、同じ父子関係であっても「同宿」と「外人」ではやはり対応が異なること、定家と孫との関係は、俊成と為家の関係と同様であったことを論じた上で、居住形態への着目を提言する。

中澤克昭「持明院基春考―公家の家業と『尊卑分脈』の注記―」持明院流入木道の祖として知られる持明院基春について、その能書人としての事績が同時代史料には見られないこと、持明院家が近世には「鷹の家」とみなされており、『尊卑分脈』にも、基春の先祖に鷹狩りを好んだことが注記されているものの、そのような事実は見られないことなどを出発点として、「諸家系図」にこめられた驚くべき秘密に肉薄する。

*

以上が主な内容である。もちろん、それぞれのコメントには結論は含ませていない。巻頭からそれぞれの論文の評価をするなど、おこがましいことである。ただ、多くの力作を寄せていただいたことは実感している。事実として、本書が中世人の豊かな世界に、明るい光を照射できていたとするならば幸いである。

目次

はじめに

第1部 武士の世界

『後三年合戦絵詞』の世界……………	藤原良章	3
平泉と鎌倉の手づくねかわらけ……………	八重樫忠郎	23
中世武蔵武士の成立——高麗郡の高麗氏の場合——……………	落合義明	39
三浦氏と京都政界……………	真鍋淳哉	63
境界と貴人——武士論あるいは都市論——……………	岡陽一郎	89
鎌倉幕府と南の境界……………	黒嶋敏	113

第2部 みちと交流

中世のムラ―北から……………飯村均 135

「別所」地名と水陸のみち……………藤本頼人 151

下総東部における水上交通……………鈴木沙織 177

―香取内海地域と房総太平洋を結ぶ水上の東西ライン―

武蔵国北辺の戦国期交通網について……………田中信司 201

骨寺村と中尊寺を繋ぐ道……………鈴木弘太 223

「直江状」と上杉景勝政権のインフラ整備……………福原圭一 251

第3部 芸道と信仰

『梁塵秘抄』の職人たち―博打・土器造をめぐって……………植木朝子 271

読経道の成尋阿闍梨説話―読誦と奇瑞……………柴佳世乃 293

板碑と木製塔婆―山形県と大分県の板碑の類似から……………山口博之 317

中世前期貴族層における父子関係覚書…………… 豎月基 339

——『明月記』に見える定家と為家——

持明院基春考——公家の家業と『尊卑分脈』の注記…………… 中澤克昭 363

あとがき

執筆者一覧